

半日陰の保・排水よいほ場に

——永田 茂穂

サトイモ科の植物で、葉柄（ずいき）を食べます。鹿児島では夏の端境期の野菜として昔から食べられており、俗に「トイモガラ」と呼ばれています。サトイモとは別種の蓮芋（はすいも）で、熱帯では多年生ですが、日本では冬の低温で地上部が枯れるため1年生です。

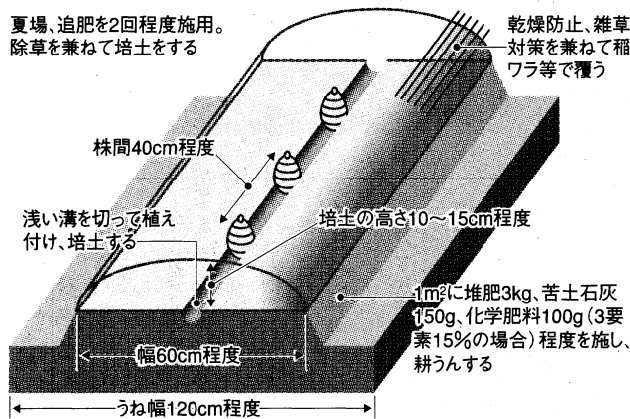
葉柄専用種で、子いもは着生しますが、肥大が悪く、繁殖用に利用するだけで、食用には向きません。草丈は1.5～2mにもなり、最盛期の8月ごろは葉数6～8枚、葉幅50～70cm、葉長70～90cm、地際の茎径は最大で10cm以上にもなります。葉は淡緑色、葉柄は淡緑白色です。

葉柄は太く、内部はスポンジ状です。シュウ酸カルシウム含量が少なく、サトイモ特有のえぐ味は極めて弱く、味にクセがありません。皮をはいでスライスし、そのまま刺身のけんにするとしゃきしゃきし、冷涼感があっておいしいです。また、酢の物、和え物、煮物などに利用されます。

生育適温は25～30度で、寒さには弱いです。ここでは普通栽培を紹介します。

栽培方法はサトイモの栽培と同じです。植え付け時期は3～4月です。日当たりが良く土が乾燥すると、えぐ味が強くなります。半日陰で保水性、排水性の良いほ場を準備します。1平方m当たり堆肥3kg、苦土石灰150g、化学肥料100g（3要素15%の場合）程度を施し、耕うんします。

トイモガラの植え付け



栽植密度はうね幅120cm、株間40cm程度とします。種いもは健全な子いもを利用します。浅く溝を切り、芽の高さをそろえていもを置き、10～15cm程度土をかぶせてうねを作ります。夏場に1、2回追肥し、（化学肥料15g/回）、除草を兼ねて、土寄せします。また、乾燥防止と雑草対策を兼ねて、稲わらなどで覆います。晴天が続くときは適宜かん水します。

収穫は6～11月です。葉を4枚程度残して、株の外側の葉柄を1～2本ずつ、随時株元から切り取って収穫します。

暖地での冬期の管理は、株の上に培土をして保護します。降霜地ではさらにモミガラや稲わらなどで覆い保護します。一度植え付けると翌年、また芽が出てきます。施肥、培土等の管理を行うと収穫できます。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部長）

平成22年3月11日（木）／南日本新聞